

● 広渡川で 飢肥杉搬出

海の幸、山の幸に恵まれた日南。飢肥藩時代、この地方を五万一千石余の伊東氏が支配していた。その外港として栄えたのが現在の日南市油津である。

飢肥藩によって堀川運河が掘削され、油津港と広渡川が結ばれたのは貞享三（一六八六）年。以来、三百年のときを経て今も当時の姿を伝えている。しかし、長い歴史の中で堀川が果たした役割は、時代とともに変化している。

油津港は湾口が南に面しているので南風に弱く、海が荒れると、近くの大堂津港や外浦港に船を回送しなければならなかった。そこで藩主の御座船を格納する目的で堀川運河が計画された。当初の予定では現在の千四百五十メートルの長さのわずか三分の一の規模でしかなかった。

藩は着工にあたって、幕府に堀川開削を打診。幕府の答えは「城普請のような認可は必要ない」。



堀川運河。飢肥藩時代の風情が残る

そこで藩は開削距離を延長。この規模拡張で広渡川に集められた木材は、外洋に出ることなく、安全に湾内に運ぶことが可能になった。江戸後期から盛んに搬出された飢肥杉は窮乏した藩財政を支えた。こうして油津港は、名実ともに飢肥藩の主要港として発展した。

油津は、明治維新以後も漁業や商用で多くの人が入り込み、城下町飢肥とは違った港町気質を生み出した。特に一九二九（昭和四）年から四一（同十六）年にかけて空前のマグロ景気にわき、油津の全盛期を迎えた。

この間、油津を代表する材木商として活躍したのが河野家、通称「河宗」である。九八（平成十）年、堀川周辺の建造物四件が登録文化財に指定された。その一つである赤レンガ館は二二（大正十二）年、河宗によって建てられた倉庫で、その周辺の町並みはマグロ景気当時の

様子を今日まで伝えている。

赤レンガ館は九七（平成九）年に競売にかけられようとしたが、地元有志三十一人が買い取り、保存活用が検討されている。現在は五月の連休、夏の「油津みなとまつり」、秋の「油津堀川まつり」などで写真展やコーヒールウンジといった短期間のイベント会場として活用されている。また堀川運河周辺の遊歩道の整備も進んでいる。

日南の観光は昔から通り抜け観光で、日南海岸、鶴戸神宮、飢肥を見て通過するパターンが多かった。油津が活性化されれば、鶴戸、飢肥との相乗効果で滞在型観光地に脱皮することも期待される。

長友禎治